

大神真神田朝臣良臣について

宮下良明

(会員 佐伯市古江区)

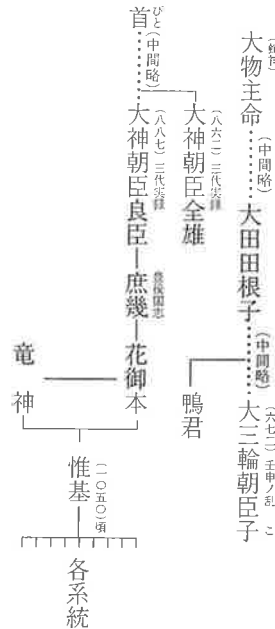
はじめに、大神良臣は六国史の一卷「日本三代実録」によると、仁和三年(八八七)三月、第五十八代光孝天皇の御代、肥前・肥後両国司を経て豊後国司という要職に着任した実在の人物である。

佐伯久良麿(七六七)国司と並んで、名宦と謳われたと「豊後国志」の著者唐橋世濟はいう。一説に豊後大神氏の祖ともいわれている。

日本書紀(七一〇)によれば、先祖、大田田根子おわたねこが、大物主命を祖とする神の子であると語られ、神「三輪」君みわ鴨君の先祖であることが付け加わられている。すなわち大三輪(大神)神社・鴨(賀茂)神社は同系統という意味でもある。

豊後国に大神良臣を遠祖とする氏族は各地に多い。しかし乍ら、系統系図になると多種多様で不整合が目立

「略系」



つ。つまり年代が極端に合わない。源平時代(一一〇〇)頃迄の系譜が詳らかではないと、後世の系図も怪しいものとなってくる。前史談「大神姓佐伯氏の研究」で佐藤巧氏も指摘している。

豊後大神氏の出自の先鞭せんべんを付けた中野幡能氏は、宇佐八幡宮史の論文の中で大神氏の出自を詳述しており、また先の史談でも、故佐脇貫一氏と御手洗一而氏が、大神氏の出自関係を取り上げ論述している。さらに故渡辺澄夫博士の著書「源平の雄緒方惟栄」では、詳細に豊後大神氏の出自に対する疑問点を解説しており、時代背景を知る良き参考資料となる。

このように多くの先学者が、豊後大神氏の系統を巡る

問題を研究されているにもかかわらず、今日なお課題を残すと、渡辺博士は指摘されている。

最初に中野論説を要約すると、十一世紀の後半、豊前国宇佐宮神職の争いに敗れた大神一族が、奥豊後に居を移して土着し、勢力を扶植しながら後世に至って、「大神惟基」を氏祖と祭る後裔が各地に幡踞した。それ等が佐伯氏を始め緒方の地名を呼称して開発領主となった。と概略このような論理を基に、中野説豊後大神氏の出自は成立するようである。

次に別府市在住の松岡実氏説によれば、昭和五十年十月発行大分県地方史第七九号所収で松岡氏は、宇佐宮司官大神氏系統を唱える中野説を批判する論文を発表、内容も明瞭に納得のいく説明をされている。そこで次に、松岡説を簡単に説明すると、豊後大神氏の出自は宇佐神宮司官とは直接関係は無く、大和大三輪(大神)氏を遠祖とする豊後国司大神良臣から出自したというもので、理由をあげれば多々あるが、大むね信仰と民俗行事の合致する点を上げている。

さらに両説を取り上げた渡辺博士は、前述の著書で若干の問題点を指摘し、次の如く述べている。

今日ではこの両説が有力であるが、いずれも今一つ決め手を欠いているというのが実状ではないか、と松岡新説の出現を紹介して、さらに今後の研究を待ちたい。このように問題の解明を今後の課題としている。

さて、豊後大神氏の研究は先学者がすでに尽くされ、筆者などが出る幕ではない。しかし乍ら、大神良臣と兄全雄に関する史料は豊後以外にも残っている。

これまで度々紹介してきた、会員で徳島県市場町在住の森秀郷氏の蔵書、尾張塘叢と一ノ宮市史がそれである。その内容によると、尾張国と大神氏との関係について両書は詳しく述べている。関係文意は後程述べることにして、次項を参考に検討を進め、筆者の見解を述べてみたいと思う。

(一)大神社(三輪明神)

奈良県桜井市のあり御神体は三輪山全体を指す、いわゆる神奈備型神体山である。

祖神大物主命がはっきり蛇身とされた三輪山型伝説は、神の正体(龍神)を知るよすがとなった「苧環」と、蛇身との婚姻によって構成されている。

そこからこの三輪山型伝説の系譜を引く昔話伝説は、「蛇婚入苧環型」と呼ばれている。「平家物語」巻八緒環にみえる緒方惟栄の先祖伝承は、典型的な蛇婚入苧環伝説であると、「日本神話伝説総覧」でも三輪山伝説の中で述べている。したがって、祖母山伝説は三輪山型系統を引いていると言えよう。

ただ、上述の説話は豊後祖母山にのみ伝承されているものではなく、類型は全国的に分布している。古代に作成された龍蛇神信仰の裏には、大三輪氏系大神・鴨一族の力によるものが大きいものと思われる。

神秘化された先祖の神通力と、信仰の目的で、各地に説話を植え付けて行った、いわゆる「貴種流離談型」であろう。

(二)尾張大神氏(塘叢二卷九六頁)

真神田神社(尾張一宮社)祭神一座大己貴命おおみち

一宮記の説也 真神田の始祖也 今社家為四座是後也 祠

官所配享也 第一神

国常立尊 第二神大己貴命 第三神大竜命 第四神 神姫
竜命

文徳実録仁壽元年(八五二)辛己詔尾張真清田神列於官社
三代実録貞観四年(八六二)真清田朝臣全雄賜姓大神朝臣大
三輪大臣 大田田根子ノ命之後也云々

右の記は尾張塘叢に記した一部分で、大神良臣の兄・全雄についてのものである。九世紀における大神氏が、尾張一宮と深く関係した所以を塘叢は述べている。なお、真清田社・真神田社は現在の尾張一宮神社を指すが、これは時代の推移で呼称が変わったものと思われる、古くから龍神伝説が言い伝えられているという。

(三)一宮市史中世編より

尾張一宮真清田神社は、木曾川の形成した扇状地から、自然堤防地帯に移行したその境目近くに立地する。尾張平野なканずく、中島郡の水田をうるおす水源は、大方はこのあたりから流下しており、竜蛇神信仰が水源と関係した民間信仰であることを、思いあわすべきである。

上述した如く「古縁起」は国常立尊説を主張しているのであるが、そのなかにも大己貴系の説話(竜蛇伝説)が混入しているようである。嵯峨天皇が、空海(弘法大

師)に請雨の祈禱を命じた時、尾張国の真神田の宮に参詣して、二匹の竜と化した神に祈ったという説話に、それがうかがえる。

真神田氏は「壬申の乱」(六七)の功臣大三輪氏の同族である。大三輪の神体が蛇身と関係のあることは「記紀」の伝えるところで、古縁起の竜神信仰と根底でつながっているらしいという。以上 一宮市史。

感想としては、木曾川の水を取り入れて、尾張平野を大開発した九世紀の初頭、干魃のため、弘法大師が一ノ宮なる真神田宮の二匹の竜神に祈ったという説話を推察する時、尾張国と大神氏との関係は、この頃すでに成立していたものと考えられる。

いずれにせよ祖母山伝説より早い時代に、尾張に伝説と竜神信仰が植え付けられていたことをうかがい知る。

(四)日本三代実録

貞観四年から仁和二年まで、清和・陽成・光孝の三代天皇、三十年間の政治と人脈を記録した史書をいう。この三代実録の記述内容のうち、大神良臣関係文を次に記載する。

(1)貞観四年(八六二)三月己卯 右京人左大史正六位上眞神田朝臣全雄賜姓大神朝臣 大田田根子命之後也

(2)仁和二年(八八六)正月十六日外從五位下行左大史大神朝臣良臣為肥後介

良臣為肥後介

(3)仁和二年二月二十一日外從五位下行肥前介大神朝臣良臣為豊後介

豊後介

(4)三月乙亥朔 授豊後介外從五位下大神朝臣良臣從五位下

先是 良臣伺官披訴 淨御原天皇(天武)壬申年入伊勢之時

良臣高祖父三輪君子首為伊勢介 從軍有功 卒後贈内小紫位

古之小紫位准從三位 然則子首子孫不可叙外位 於是 下

外記而考美之 外記申明云 贈從三位大神朝臣高市麿 從四位上安麻呂 正五位伯麻呂兄弟三人之後 皆叙内位 大神引

田朝臣 大神栲田朝臣 大神掃石朝臣 大神眞神 田等 遠

祖雖同 派別各異 不見應叙内位之由 加之神龜五年以降有

格 諸氏先叙外位 後預内叙 良臣姓大神眞神田朝臣也 子

首之後至千全雄 無預土位者 今請叙内品 事乖格旨 勅毀

良臣及故兄全雄外位告身 特賜内階

以上三代実録に記載された「良臣」の関係文を抜粋した。内容は天武天皇の「壬申の乱」六七二年の時、良臣の先祖三輪君子首が伊勢国司に在任中、天皇に従い軍

功があったため、自分達の先祖は皆内位であるので、自分達兄弟も外位から内位に格上げしてくれと奏上したところ、これに対する朝廷側の回答は、良臣の姓は大神真神田朝臣で、三輪君小首の後裔であることが分かった。そこで特例として、兄全雄と共に内位に叙せられたという意のように思う。当時の政治・権力の一端を記載しているものと推察する。

いずれにしても三代実録の内容に添ってみると、良臣は豊後国司の時代、外従から内階へと格上げされた。ところが豊後国志では名宦良臣は、寛平四年(八九二)迄豊後国司として在任していた事になっているが、その後の足跡が不明な点である。

考えられることは、先是。良臣伺官披訴。この事により豊後国司から、宮廷内の職に転任したものと思われる。

(五)大神氏。(日本古代氏族人名辞典引用)

大神氏 大天神社を祭る大和国磯城地方(現在の奈良県磯城郡の大半と天理市の一部、桜井市西北部を含む一帯)の氏族。

氏名は三輪または大三輪とも書き、大和国城上郡大神

郷の地名に基づく。姓は初め「君」、天武十三年(六八四)十一月、朝臣を賜わった筆頭に大三輪の君とある。

「古事記」にも意富多泥古命、神君・鴨君の祖とするので、大神氏は大物主神の後裔とされ、この神の祭祀をつかさどっていたのである。とこのように大和大神氏先祖の系譜を記している。次に宇佐宮大神氏の出自について同辞典を見ると、

大神氏 豊前国宇佐八幡宮の祠官となる氏族。始祖は欽明朝に大菩薩を祭祀した大神朝臣比義とするが、七世紀までの系譜は不詳。天平二十年(七四八)祝部大神宅女・杜女が外従五位下に叙位。天平勝宝元年(七四九)杜女と諸男の子田麻呂に朝臣の賜姓があり、宝龜四年(七七三)田麻呂が大宮司になり、孫、清麻呂が弘仁六年(八一五)大神氏・宇佐氏が宮司となるべき申請を行って以来、この子孫が代々大宮司・祝を務めた。

なお、始祖の大神比義は八世紀以降、宇佐八幡宮大宮司・神主・祝などとなる大神氏の祖で、伝承上の人物である。

以上古代氏族人名辞典に掲載された両系統大神氏を示した。そこで辞典にしたがい独自に考察してみると、大

和大神氏は六国史に認められた日本国史上の氏族で、良臣はその一族に当たる。

一方宇佐宮系大神氏は七世紀までの系譜は不詳とされ、その祖比義なる人物の実態はなく、傳承上の人物と記す。

其の子孫田麻呂と杜女もりめは、東大寺大仏建立に貢献した功により、無姓から大神姓を贈られた。しかし、事件を起し、十数年間種子島に流され、後田麻呂だけが復位したという。

以上から豊後大神氏の出自を判断すると、前に述べた松岡氏論説に説得力があり、大三輪系豊後大神氏の方が正しいように考えられる。

竜蛇神信仰と伝説

大神良臣の豊後国司赴任以降、竜蛇神説話が、大野川流域の開発と併行して広く語り継がれたものと思われる。その信仰と説話を伝播した者達を想定する一つに、開発領家の指図に従った大神・鴨系がもの職農集団が考えられる。

祖母山系鉾山の採掘と地域一帯の水田開発を手掛けた

領家は、信仰と説話を植え付け、さらに磨崖仏・石仏を祀って信仰の場とした。

以上は莊園が制度化された平安時代における豊後の状況ではなかったかと想像される。

緒方町御田蔀神社

先日、元社会教育課長の加藤健一氏と共に、緒方町へ石風呂の見学に行った際、御田蔀神社(平家物語では石環いしたま)に参拝した。そこから眺めた祖母山の景観は素晴らしい。神社はその遥拝所ようはいじよとして建立されたものと思われる。この辺りから広大な緒方平野が開けている。神社は平家物語にちなんで付けられた社名であろうか。

おわりに、大神良臣と豊後国の関係を筆者の感じたまを述べさせてもらったが、良臣の事跡は豊後国司だけ

で片付けられる問題ではない。また、中世を通じて大神氏の残した遺物は、佐伯荘のみ金石文として現存する。弥生町上小倉の磨崖仏(嘉暦元年へ一三二六)大願主大神惟武・康永四年(一三四五)願主大神惟覚・佐伯荘応永二十一年(一四一四)施入大神惟世の鰐口銘文、さらに大神氏姓記入の神社棟

礼、石造物）碑文等がそれである。

これにより中世佐伯荘約六百年の歴史に大神氏が深く根を下ろしていた史実が分かるものと思う。つまり大神良臣の後裔と考えられるからである。

【参考文献】

日本三代実録

日本古代氏族人名辞典

一宮市史

源平の雄緒方三郎惟栄

尾張塘叢

日本神話伝説総覧

神社辞典

佐伯一族の興亡

大分県地方史七九号



日帰り研修に参加して

高 司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

出 発

・日時・四月十日(土) 研修先・宇佐市

低気圧北上に伴い天候を気にしつつ、弥生町役場に集合、午前八時マイクロバス、自家用車二台に分乗出発した。参加者十二名(敬称略)、汐月、矢野、小野、佐藤、宮下、五十川、吉田、御手洗、深田、小林、高司。

研修部より車中で資料を配布される。深謝。

米良から大分自動車道を走る頃は、天気も回復し薄日がさし、ほっとした気持ちに浸るのも束の間、挟間を過ぎ別府に入ると濃霧の発生で通行止め。止むなく別府に出て国道十号線を、日出く赤松峠く山香経由で宇佐市へ。

大分県立歴史博物館に十時過ぎ到着した。

高速の道を遮る山の霧